五輪が開幕しても忘れない

表題は『AERA』7 月 26 号、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんとフリーライターの武田砂鉄さんの対談。コロナ禍で五輪強行を前に、一部だけでも紹介したい。

安田 緊急事態宣言中でもオリンピック開催とのことですが、これまで場当たり的な対応ばかりですよね。これまでも、パブリックビューイングを企画します→批判される→やめる、オリンピック会場でアルコール販売を認める方針を示す→批判される→やめる。そもそもこういう批判の声って予想できる範疇だと思うんですが、場当たり的にやってみて批判されたからやめようみたいな図式を見ていると、海外から何万単位でやってくる方々への感染対策などができているとは到底思えません。でも今はこういう声をあげると「いまさら批判するな」みたいな空気感がじわりじわりとできてしまっていて、そういう怖さみたいなものがあります。

武田 月曜日に提案したことが、火曜日に批判されて、水曜日には取り下げるみたいなことを毎週のようにやっていたら、普通、社長はクビで、会社は潰れます。オリンピック関連の諸問題について、指摘する方が明らかに冷静で、指摘される方が感情的に動いている。それなのに、感情的に逃げ回っている人たちよりも、その都度、「それはおかしい」と訴える側の方が感情的だという風潮に切り替わってきている。それはメディアの問題も大きいと思いますが、いや、それくらい見極めてくださいよ、と感じますね。

武田 オリンピックを開催し、世界各国から選手や関係者が来日し、それが合図となり、人の流れが増えれば、感染者数が増えるという予測が専門家から出ています。感染者数が増えるということは、その中から、亡くなる人が出てくるということ。誰かが亡くなるかもしれない、それなのに開催する、という判断がよくわからない。少しはしょうがないでしょ、ということなのか。

安田 おっしゃる通りです。政府や組織委員会の人たちは、専門家の意見に耳を傾けるというよりも、専門家をオリンピック開催のための「お墨付き」を与える人のように扱っているんですよね。

武田 命を落としたり、重症化したりするのは自分かもしれないし、自分の大切な人かもしれない。感染者数が増えれば、亡くなる人が出てくる。こんな今だからこそ五輪で感動を届ける、という声が聞こえてきますが、いい成績を残すという意味なのでしょう。いや、でも、メダルとコロナって、比較しちゃいけないことなんじゃないかと。

安田 もともとこの東京オリンピックは「復興五輪」を掲げていたわけですよね。復興五輪っていうことは、災害で亡くなられた方、死者の命とともに迎えるという意味合いがあったはずなんです。それが死者を増やすリスクを背負ってまで開催するオリンピックになるということは、私もはなはだ疑問です。

（2021 年 7 月 22 日）